

2013年から2021年までの星が浦川 下流域における鳥類観察記録

横山 篤史[※]

Bird observation records in the lower Hoshigaura river reaches from 2013 to 2021
Atushi YOKOYAMA[※]

背景

釧路市南西部で流れる星が浦川。現在では釧路市鶴野付近の源流部から、人工的な河川のようにも見える、釧路市西港区第四埠頭（以降第四埠頭）の西側にあり、緩やかな流れの河川である。星が浦南6丁目に掛かる海星橋から下流では、西から星が浦川同様に人工的な流れにも見える竜神川、東からは別途前川が合流した箇所から、東へ大きく蛇行しつつ、第四埠頭寄りで河口となる（図1）。

この星が浦川下流域へ、以前から訪れている方の話では、過去は竜神川と別途前川の合流箇所付近で既に河口だったものの、第四埠頭が建設されてからは潮流が変化したのか、当時の河口付近に土砂が堆積し、現在の東へ蛇行する流れになったとの話を聞く。

現在では、国土地理院での地図・空中写真閲覧サービスのサイトで、当時の風景を航空写真で確認することができる。その掲載されている、星が浦川下流域の写真を見ると、1977/9/28では、現在より大きく東へ蛇行した星が浦川と、現在の下流と判断できる箇所で直線化工事を行っているのが確認でき、1987/5/20には、現在の第四埠頭の防波堤らし

き建造物と、竜神川と別途前川との合流箇所付近は、現在の星が浦川下流域の場所と一致する。その後の2011/10/4には、第四埠頭も完成しており、下流から東に蛇行している、現在の星が浦川の流れとなる。

その星が浦川は、海星橋上流から流入する、大楽毛終末処理場の浄化排水や、竜神川と別途前川の合流により、釧路では数少ない不凍河川であり、秋～春では、コガモ主体で多数のカモ類が観察できる。他にも、毎年秋ごろから、海上のカムリカイツブリの観察数が増加し、11月～12月上旬には、その年での観察数が最大になる、興味深い記録がある。

また、星が浦川の河口付近では、釧路市街周辺では干潟の出現エリアが少ないため、観察が難しいシギ/チドリ類も、潮汐の影響により、干潮時に出現する干潟と海岸を中心に、春/秋の渡りの時期に多数観察できる。更に海岸寄りの下流域に目を向けると、広大な草原が広がっており、ここでは、ノビタキやヒバリなどの草原性の野鳥が観察できる。このように、星が浦川下流域は、多種多様な野鳥の観察が行える探鳥地である。



図1. 調査対象地（国土地理院の電子地形図25000を掲載）

※ くしろ うみぴりか Kushiro Umipirika

筆者は2013年2月から、この星が浦川下流域での野鳥観察を継続して行っている。2017年2月からは星が浦川下流域と他の探鳥地も含めて、記録を確かなものとするために、観察中は都度野帳へ観察種の記載を行っている。また、近年の第五埠頭と付随した防波堤の着工により、潮流にも変化が起きている可能性があり、野鳥観察での変化も2021年では特に感じられるようになってきたことから、現在の星が浦川下流域での野鳥観察では、今後の変化が起きる過渡期ではないかとも考えている。

本稿では、星が浦川下流域の観察目録の作成を目的とし、2017年2月から2021年12月の期間では、野帳への記載項目の拡充により得た記録から、このエリアで特徴的なカンムリカイツブリ観察数や、シギ/チドリ科の詳細な観察記録等も報告する。

調査範囲

釧路市から国道38号線を大楽毛に向かい、その後は、星が浦川手前で南へ進み、星が浦南6丁目の星が浦川に掛かる海星橋より下流から、川沿い～海岸～海上～河口と観察を行った。なお、海上での観察距離は目視で観察できる距離約200m、一眼レフカメラでは約800mまでを範囲とした。

主な観察場所は、草原のある下流から星が浦川の蛇行部に沿わず、南に直進して海岸に向かい、海岸から河口へ進むルートである。なお、海星橋近辺は月に1回程度、星が浦川下流域の観察を終えた後、徒歩で向かい観察を行った。

調査方法

2013年2月から2021年12月まで、対象範囲を踏

査して観察を行った。また補足として、この場所での野鳥観察を行う方々からも情報を収集した。

観察方法としては、目視/双眼鏡での観察もあるが、主に一眼レフカメラにより観察した。望遠レンズにより、35mm換算で800～960mmとなるため、遠方の姿もファインダー越しで観察でき、その方法で識別できなければ、写真撮影での確認を行った。特に迷鳥などの稀な種類は、至近距離での観察やカメラ撮影によって、間違いないと判断できた種類のみ記載した。また、曜日や時間を決めての観察は行わず、年間を通して週に1日程度の観察を行った。

特にシギ/チドリの渡来時期のピークである4、5、8、9月は週に2日程度で通うことにより、観察もれを極力なくすよう努めた。なお、観察時間は早朝が主体であるが、2020年から春/秋の渡りの頃では可能な限り夕刻も含めて観察を行った。

調査結果及び考察

2013～2021年での観察種の結果は以下(表1)の通りである。なお、スズメ/ハシボソガラス/ハシブトガラス/ドバト/トビは2020年11月から記録を行った。2013年2月から、星が浦川下流域で記録できた種としては153種である。過去にはマダラチュウヒ1羽(2013/5/12)やキガシラセキレイ1羽(2016/5/8～5/10)、コアジサシ1羽(2017/5/28)やマミジロツメナガセキレイ1羽(2018/5/20)、オニアジサシ1羽(2019/8/8～8/10)とハシブトアジサシ1羽(2019/8/9)、カリガネ1羽(2019/11/20、田島 私信)、ケリ1羽(2021/7/21、関根 私信)など、稀な観察種や迷鳥と思われる、8種の観察記録がある(図2～6)。

表1. 2013～2021年観察記録

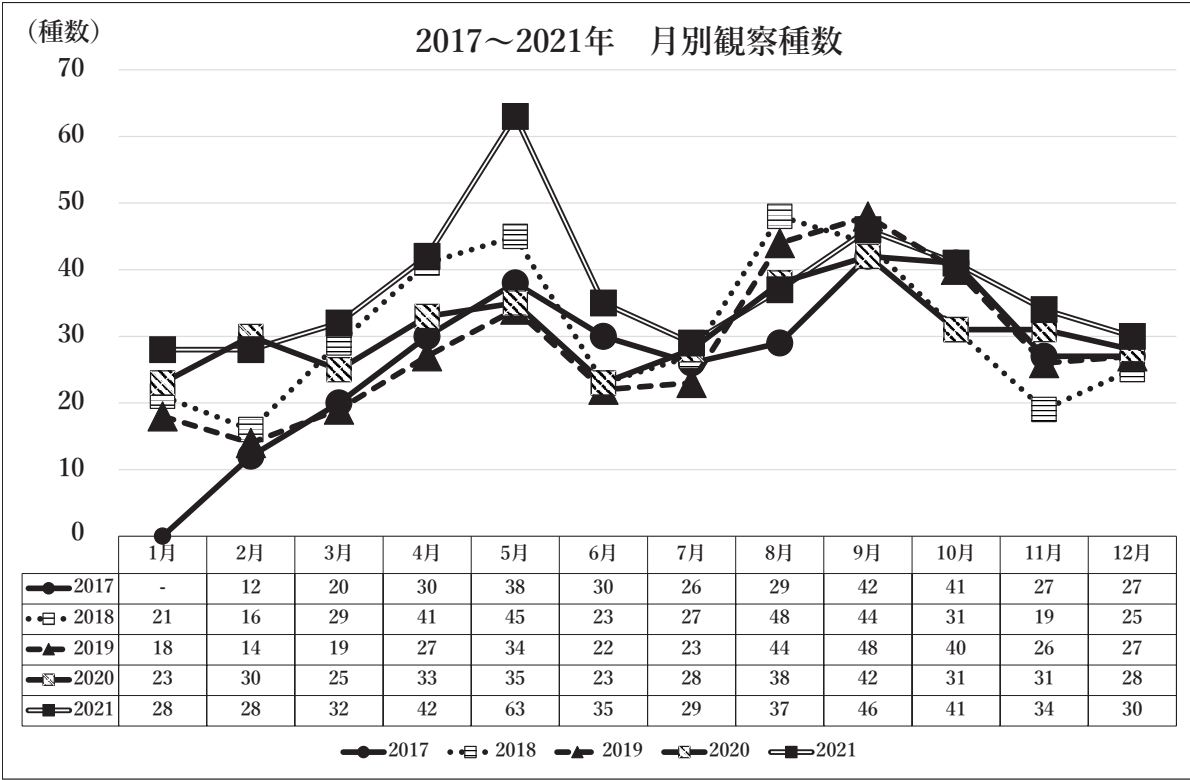
目名/科名	No	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	主な観察エリア	備考
カモ目 カモ科	1	ヒシクイ (亜種オオヒシクイ含む)				●					●	●	●		上空・川	
	2	マガン										●	●		上空・9号公園	
	3	カリガネ											●		海岸	2019/11/20観察情報(田島 奏一郎)
	4	ハクガン	●	●	●										川	2020/1/23～3/4観察
	5	シジュウカラガン										●	●		上空・海上	
	6	コクガン				●									海上	2021/4/15観察(海上を飛行して通過)
	7	オオハクチョウ	●	●								●		●	川	
	8	オシドリ			●	●		●		●					川	
	9	ヨシガモ			●	●	●								川・海上	
	10	ヒドリガモ	●	●	●	●	●	●			●	●	●	●	川・干潟・海上	
	11	マガモ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	川・海上	
	12	カルガモ				●	●	●	●	●	●	●	●	●	川	
	13	ハシビロガモ			●	●	●				●	●	●	●	川・干潟・海上	
	14	オナガガモ	●	●	●	●	●				●	●	●	●	川・干潟・海上	
	15	シマアジ				●				●					川・海上	
	16	コガモ	●	●	●	●	●	●			●	●	●	●	川・干潟・海上	
	17	アメリカコガモ ※本稿ではコガモと別種扱い	●	●	●	●					●	●	●	●	川・干潟	
	18	ホシハジロ	●	●	●								●	●	川	
	19	キンクロハジロ	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●	川・干潟	
	20	スズガモ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	川・干潟・海上	
	21	シノリガモ	●	●	●	●	●					●		●	海上	
	22	ビロードキンクロ	●		●	●	●							●	海上	
	23	クロガモ	●	●	●	●	●	●			●	●	●	●	海上	
	24	コオリガモ										●	●	●	川	
	25	ホオジロガモ	●	●	●	●	●					●	●	●	川・海上	
	26	ミコアイサ		●											川	
	27	カワアイサ	●		●										川	
	28	ウミアイサ	●	●	●	●	●	●				●	●	●	海上	
カイツブリ目 カイツブリ科	29	カイツブリ											●		川	
	30	アカエリカイツブリ			●	●	●	●		●	●	●			海上	
	31	カンムリカイツブリ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	川・海上	
	32	ミミカイツブリ				●	●				●				海上	
	33	ハジロカイツブリ	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●	海上	
ハト目 ハト科	34	カワラバト (ドバト)				●	●	●	●	●	●			●	上空・草原	
	35	キジバト					●	●				●			上空・草原	
アビ目アビ科	36	アビ				●	●	●			●				海上	
	37	オオハム					●								海上	
	38	シロエリオオハム						●						●	海上	
ミズナギドリ目ミズナギドリ科	39	フルマカモメ						●							海上	2018/6/28観察(家前)
カツオドリ目 ウ科	40	ヒメウ	●	●	●	●				●					海上	
	41	カワウ					●			●	●	●	●		川	
	42	ウミウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	川・海上	

2013 年から 2021 年までの星が浦川下流域における鳥類観察記録

目名/科名	No	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	主な観察エリア	備考
ペリカン目 サギ科	43	ダイサギ			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	川辺・干潟・海岸	
	44	ダイサギ	●			●	●	●	●	●	●	●	●	●	川辺・干潟・海岸	
	45	コサギ				●									川辺・干潟	
ツル目クイナ科	46	クイナ									●				川辺	
	47	オオバン	●									●	●	●	川	
カッコウ目カッコウ科	48	カッコウ					●	●	●						上空・草原	
アマツバメ目アマツバメ科	49	ハリオアマツバメ								●					上空・海岸	
	50	アマツバメ						●	●	●	●				上空・海岸	
チドリ目チドリ科	51	ケリ							●						川辺・干潟	2021/7/21観察情報(関根 琢実・直美)
	52	ムナグロ				●	●	●		●	●	●			干潟・海岸	
	53	ダイゼン					●			●					干潟・海岸	
	54	ハジロコチドリ				●				●	●				海岸	
	55	コチドリ			●		●	●	●	●					川辺・干潟・海岸	
	56	シロチドリ				●	●			●					海岸	
	57	メダイチドリ					●	●	●	●					海岸	
チドリ目ミヤコドリ科	58	ミヤコドリ				●	●	●	●	●					海岸	
チドリ目セイタカシギ科	59	セイタカシギ				●	●	●	●	●	●	●			川辺・干潟	
チドリ目 シギ科	60	オオシギ				●	●	●	●	●					上空	2021/10/6～10/7観察
	61	タシギ								●	●	●			川辺・草原	
	62	オオハシシギ										●			川辺・干潟	
	63	オグロシギ					●				●				川辺・干潟	
	64	オオソリハシシギ					●			●					海岸	
	65	チュウシャクシギ				●	●	●		●	●				川辺・草原・海岸	
	66	ホウロクシギ					●			●					海岸	
	67	ツルシギ					●				●				川辺・干潟	
	68	アカアシシギ			●		●								川辺・干潟・海岸	
	69	コアカアシシギ								●	●	●			川辺・干潟	
	70	アオアシシギ					●	●			●	●			川辺・干潟	
	71	クサシギ									●				川辺	
	72	タカブシギ					●			●	●	●			川辺・干潟	
	73	キアシシギ				●	●	●	●	●	●				川辺・干潟・海岸	
	74	ソリハシシギ					●	●	●	●					川辺・干潟	
	75	イソシギ				●	●	●	●	●	●				川辺・干潟	
	76	キョウジョシギ				●	●			●	●				海岸	
	77	オバシギ								●	●				川辺・干潟・海岸	
	78	ミコビシギ		●			●			●	●	●	●	●	海岸	
	79	トウネン				●	●	●	●	●	●	●	●	●	川辺・干潟・海岸	
	80	ヨ－ロッパトウネン	●				●			●	●	●	●	●	川辺・海岸	
	81	オジロトウネン					●			●	●				川辺・干潟	
	82	ヒバリシギ								●	●				川辺・干潟	
	83	アメリカウズラシギ								●	●	●			川辺	2014/10/5, 2017/9/17観察
	84	ウズラシギ											●	●	川辺	
	85	サルハマシギ					●								川辺・海岸	2016/5/7～5/10観察
	86	ハマシギ		●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	川辺・干潟・海岸	
	87	キライ								●	●	●	●	●	川辺・干潟・海岸	2019/8/9観察 2019/8/8～8/10観察 2017/5/28観察
	88	エリマキシギ				●	●			●	●				川辺・干潟・海岸	
	89	アカエリヒレアシシギ					●	●	●	●	●	●			川辺・海岸	2017/9/21～10/5観察 2017/7/25観察
	90	ミツユビカモメ									●	●			海岸・海上	
チドリ目 カモメ科	91	ユリカモメ				●	●			●	●	●	●	●	川・海岸・海上	2019/8/9観察 2019/8/8～8/10観察 2017/5/28観察 2017/9/21～10/5観察 2017/7/25観察
	92	ウミネコ			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	川・海岸・海上	
	93	カモメ	●	●	●	●				●	●	●	●	●	海岸・海上	
	94	ウシカモメ			●					●	●	●	●	●	海岸・海上	
	95	シロカモメ	●	●	●	●				●	●	●	●	●	海岸・海上	
	96	セグロカモメ				●				●	●	●	●	●	海岸・海上	
	97	オオセグロカモメ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	川・海岸・海上	
	98	ハシブトアジサシ								●					海岸	
	99	オニアジサシ								●					海岸・海上	
	100	コアジサシ					●								海岸	
	101	アジサシ					●			●	●				海岸・海上	
	102	クロハラアジサシ								●	●	●			海岸・海上	
チドリ目トウゾクカモメ科	103	クロトウゾクカモメ								●					海岸	2017/7/25観察
チドリ目ミズメ科	104	ウトウ								●					海上	
タカ目ミサゴ科	105	ミサゴ								●	●	●			上空・海岸	
タカ目タカ科	106	トビ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	全域	2013/2/24観察(録) 2013/5/12観察
	107	オジロウシ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	川辺・海岸・海上	
	108	オオウシ	●		●										海上・上空	
	109	チュウビ					●	●							草原	
	110	ハイロチュウビ			●										草原	
	111	マダラチュウビ					●								上空・草原	
	112	ハイタカ										●			上空・草原	
	113	オオタカ	●								●	●			上空・草原	
	114	ノスリ			●						●				上空	
	115	コミズク	●	●	●									●	草原・川辺	
フクロウ目フクロウ科	116	カウセミ							●	●					川辺	
ブッポウソウ目カウセミ科	117	アリスイ											●		川辺	
キツツキ目キツツキ科	118	アカゲラ								●					川辺	2021/7/15観察(上空通過)
	119	チョウゲンボウ	●	●	●						●	●			上空・草原	
ハヤブサ目 ハヤブサ科	120	チゴハヤブサ								●					上空	
	121	ハヤブサ					●	●	●	●	●	●	●	●	上空・川辺・海岸	
スズメ目 カラス科	122	ハシボソガラス	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	全域	2016/4/24観察
	123	ハシブトガラス	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	全域	
スズメ目シジュウカラ科	124	シジュウカラ					●	●	●	●	●	●	●	●	川辺	
スズメ目ヒバリ科	125	ヒバリ			●	●	●	●	●	●	●	●			上空・草原	
スズメ目ツバメ科	126	ショウドウツバメ					●	●	●	●					川辺	
	127	ツバメ				●	●	●	●	●	●	●			川辺	
スズメ目ヒヨドリ科	128	ヒヨドリ		●	●								●	●	上空	
スズメ目センニュウ科	129	シマセンニュウ							●	●					川辺	
スズメ目ヨシキリ科	130	ヨシキリ					●	●	●	●	●				川辺・草原	
スズメ目ミソサザ科	131	ミソサザ											●		川辺	
	132	ムクドリ	●							●	●	●			草原	
スズメ目ムクドリ科	133	ホシムクドリ	●				●								草原	
	134	ツグミ	●	●	●	●									草原	2020/1/21～2/2観察情報(有澤 真由美)
	135	ノハラツグミ	●	●											川辺・草原	
	136	ノビタキ				●	●	●	●	●	●				草原	
スズメ目ヒタキ科	137	イトヒヨドリ				●									9号公園	
	138	スズメ	●									●		●	草原	2016/4/24観察
スズメ目 セキレイ科	139	マミジロツメナガセキレイ					●								草原	2018/5/20観察 2016/5/8～5/10観察
	140	キガシラセキレイ					●								川辺	
	141	キセキレイ								●	●				川辺	
	142	ハクセキレイ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	川辺・干潟・海岸	
	143	ムネアカタヒバリ					●								川辺	
	144	タヒバリ	●	●		●	●				●	●	●	●	川辺・草原	

目名/科名	No	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	主な観察エリア	備考
スズメ目 アトリ科	145	アトリ		●	●										草原	
	146	カワラヒワ（亜種オオカワラヒワ含む）	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	草原	
	147	ベニヒワ													草原	
	148	ハギマンコ	●	●									●	●	草原	
スズメ目	149	ツメナガホオジロ	●	●	●										海岸・草原	
ツメナガホオジロ科	150	ユキホオジロ	●	●	●									●	海岸・草原	
スズメ目 ホオジロ科	151	シラガホオジロ	●	●											草原	
	152	アオジ				●	●								草原	
	153	オオジュリン			●	●	●	●	●	●	●	●	●		川辺・草原	
合計			46	43	49	63	81	51	42	72	81	67	48	50		

表2 . 2017 ～ 2021 年 月別観察種数



そのうちマダラチュウヒは、2013/6/8に阿寒郡鶴居村で観察記録があり、星が浦川下流域での観察日が近いことと、観察が殆どない種であることから、同一個体と考えているが、現在も確定には至っていない。しかし、2013年2月からの観察で、この星が浦川下流域は、渡りの中継地ではないかという推測があり、釧根地区で本来生息していない種も、その要因もあって観察出来たのではないかと考えている。

また、2017年2月からの月別観察種（表2）では、4月～5月と8～10月に観察種の増加が確認できる。これは、シギ/チドリの渡りでの飛来数増加によるものである。シギ/チドリ類は星が浦川の流れも緩やかであることと、潮汐により出現する干潟で採餌行動を行う種の姿も多いことから、海岸も含めて渡りのルートで、星が浦川下流域を利用しているとも考えられる。

また、星が浦川の海岸で、10年近く清掃活動を行っている方からの話や、付近の第五埠頭西側での海岸の漂着ごみの状況と比較しても、2021年は星が浦川の海岸の漂着ごみが減少している。これは、現在建設中の釧路市西港区第五埠頭（以降第五埠頭）に付随する、南へ延びる防波堤の建設と関係しているとも

思われる。また、この防波堤が建設の過程で南北に分断していた頃に、阿寒川から流れつく土砂が、建設中の防波堤に蓄積していたことを知る機会があった。その後、分断していた防波堤が繋がったことにより、阿寒川からの土砂の流入が、星が浦川の海岸で減少すること。そして、第四埠頭～第五埠頭間の海流にも、変化が起きている可能性があることから、鳥類相が変わることが考えられるため、今後も継続して観察を行うこととする。



図2. マダラチュウヒ



図 3. コアジサシ



図 4. キガシラセキレイ

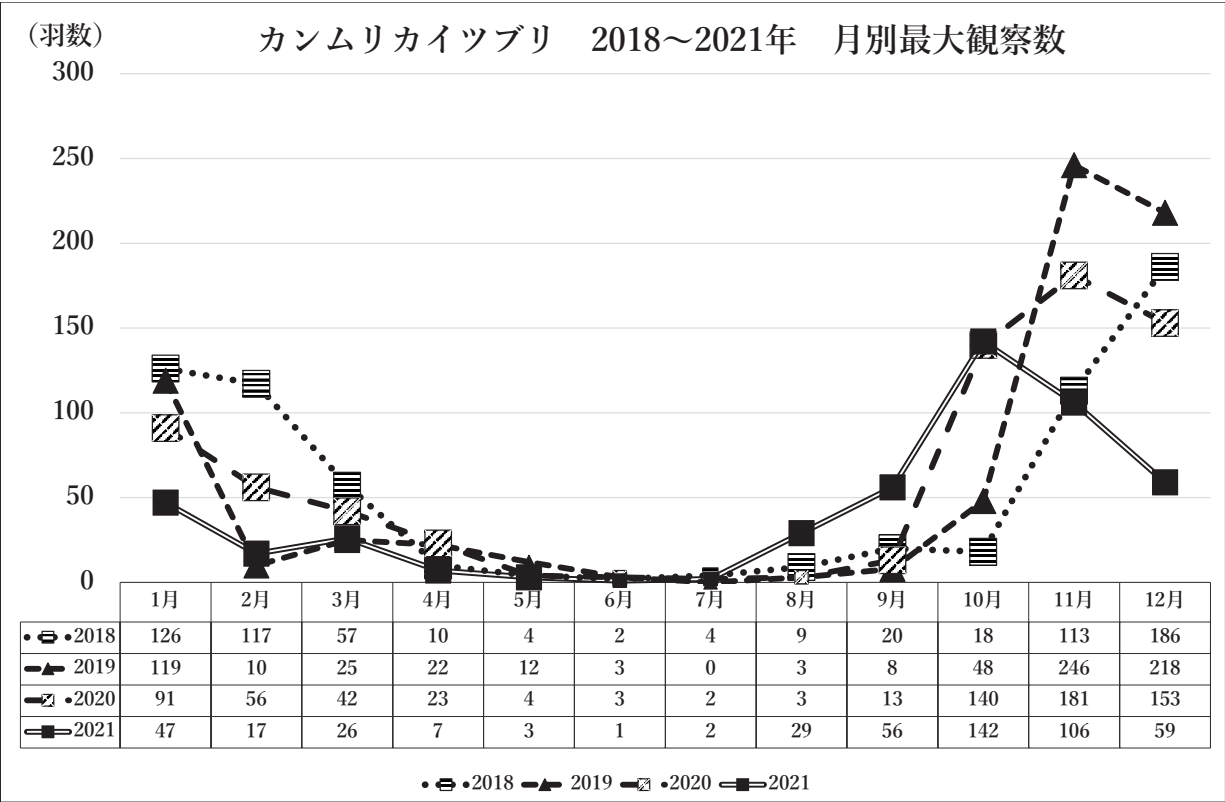


図 5. オニアジサシ



図 6. ハシブトアジサシ

表 3. カンムリカイツブリ 2018 ～ 2021 年 月別最大観察数



注目種

星が浦川の下流および、海上で主に観察出来る種は、カンムリカイツブリ / シギ・チドリ類 / カモ科であるが、2018 年からこの 3 種を主軸に、数も含めて継続して観察を行った。その観察記録を簡潔であるが以下に記載する。

カンムリカイツブリ観察

詳細な記録がある 2018 年～2021 年の月別最大数を記す（表 3）。

その傾向として、毎年 8 月頃から、星が浦河口の海上で増加の傾向を見せ始め、11 月～12 月上旬には、その年で最大の観察数となる。その後は緩やかな減少傾向となるが、冬季は 100 羽程度が滞在し、5 月頃になると数羽程度の観察数となる。

なお、北海道におけるカンムリカイツブリの最大越冬地は函館湾周辺域であるが、当地は同地点と比べても遜色ない越冬数である（生物多様性センター 2020）。これは、それだけ多くの個体数を受け入れるだけの資源量が、星が浦にあるためと考えられる。

カンムリカイツブリの主な観察場所は、星が浦川河口から繋がる、第四埠頭～第五埠頭間の海上である。第四埠頭側にある星が浦川河口付近の海上では、カレイなどの魚類を採餌するカンムリカイツブリを観察できることがあり、10 月頃からスズガモと混合した群れを、海上で観察する機会が多くなる。

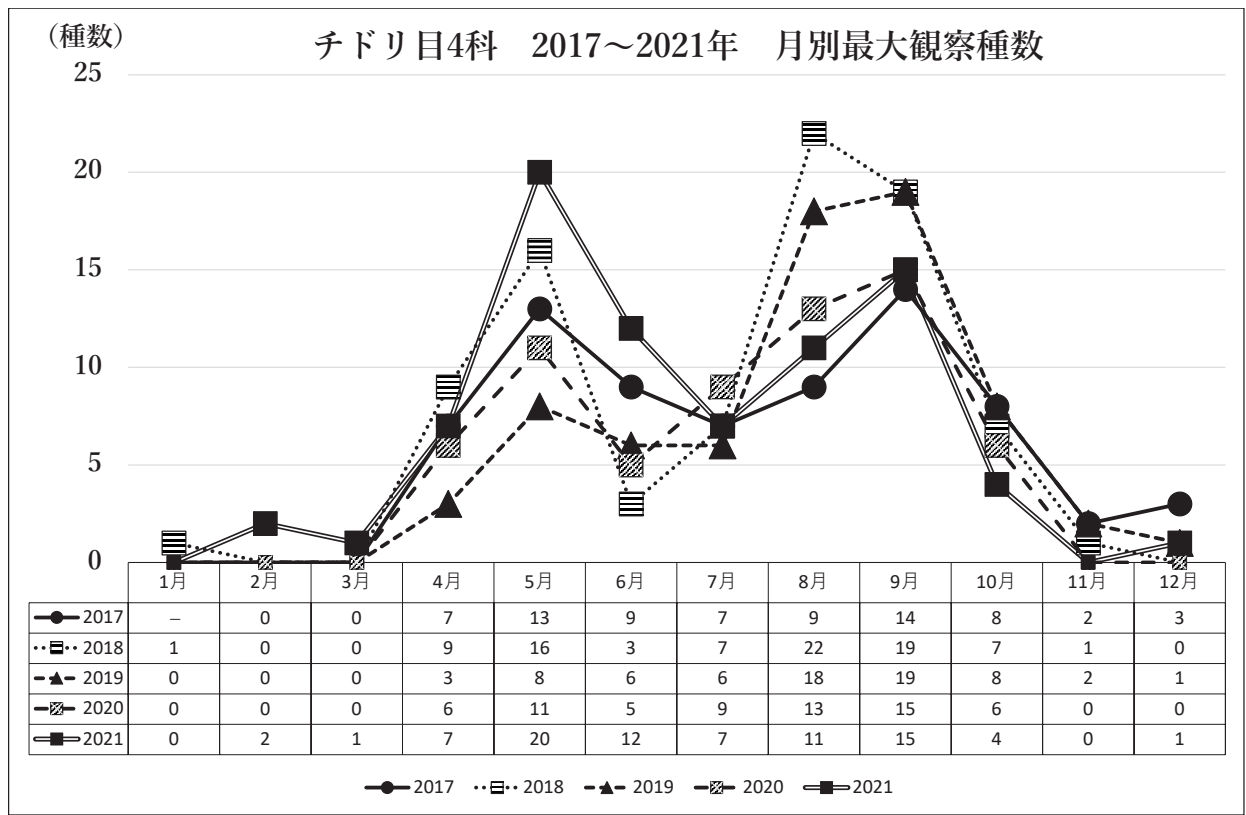
この星が浦川の海上で観察出来る、カンムリカイツブリの群れは成鳥が殆どであり、幼鳥は観察出来ても群れの中に 1～2 羽程度である。また、2021 年のカンムリカイツブリ観察の月別最大数は、記録を

開始した 2017 年以降では低い数値となっている。

しかし、2021 年 6 月より、星が浦川付近での観察エリアの拡大を行うため、星が浦川西側にある第五埠頭西側の海岸にも、週に 1 日程度観察で踏査しているが（表 3 の記録へは含めていない）、7/8～10/17 に海上でカンムリカイツブリを 1～15 羽観察できた。また 10/31 には、星が浦川の海上で 142 羽の観察後、第五埠頭西側の海岸へ赴くと、海上で 98 羽を観察できた。その後の 11/9 では、星が浦川の海上で 74 羽の観察後、第五埠頭西側の海岸へ赴くと、海上で 93 羽を観察できた。この 10/31 と 11/9 の星が浦川の海上と、第五埠頭西側海岸の海上での、カンムリカイツブリの観察数を合算すると、10/31 には 240 羽であり、11/9 は 167 羽となるが、特に 10/31 に合算した 240 羽は、星が浦川の海上での観察記録として最大観察数である、2019/11/27 の 246 羽に次ぐものである。

しかし、この 10/31 と 11/9 の観察日以降の、星が浦川海上のカンムリカイツブリは、11/1 に 106 羽であり、11/12 では 33 羽であった。また、第五埠頭西側海岸へも 10/31 以降の 11/7 と、11/9 以降の 11/12 に赴いたが、海上にカンムリカイツブリの姿は確認できなかった。このため、10/31 と 11/9 に第五埠頭西側海岸の海上で、多数観察できたカンムリカイツブリの群れは、星が浦川の海上の群れと合流せず、後日移動したと判断している。ただ、この観察によって、今までも他のカンムリカイツブリの群れが、越冬による移動で星が浦の海上に飛来し、数日で他のエリアに移動する可能性や、その時の観察で、星が浦川の海上のカンムリカイツブリが、大き

表 4. チドリ目 4 科 2017～2021 年 月別最大観察種数



な観察数となっていたのではないかと推測している。

また 12/8 には、星が浦川の海上で 45 羽の観察があった。その翌日の 12/9 に、星が浦川の海上で 37 羽の観察を行った後、第五埠頭西側海岸へ向かい、海上で 8 羽を観察できた。この観察数の記録により、星が浦川の海上に越冬で飛来したカンムリカイツブリの群れの一部が、第五埠頭西側海岸の海上も含め、星が浦川の海上付近から採餌目的もあって、移動を行っていることを推測しているが、12/9 の 1 例のため、今後も継続して観察を行うこととする。

ただ、毎年多数のカンムリカイツブリが、星が浦川の海上へ越冬のため飛来しているとみられるが、どこからこれだけのカンムリカイツブリが、星が浦川の海上へ飛来しているのか、興味深いものである。

シギ / チドリ類観察

2017 年から詳細な観察を行っている、シギ / チドリ類の記録を示す（表 4～8）。2018 年からは 3 種の観察数を細かく確認できたことから、表 6～8 の月別観察最大数の記載は 2018 年からとする。

そのチドリ目 4 科（チドリ科 / ミヤコドリ科 / セイタカシギ科 / シギ科）の月別による渡来種数では、4 月ころから春の渡りでの観察数が増加し、5 月でピークとなる傾向が確認できた。その後の秋の渡りでは、8～9 月ころに観察種数が増加する動きを観察できた（表 4）。また、主な観察場所は星が浦川

下流域での干潟や河口 / 海岸である。なお、筆者の観察は早朝が主体であるが、2020 年からの春 / 秋の渡りの頃には可能な限り夕刻も含めて観察を行った。結果、早朝では観察出来なかった種も、夕刻には観察することがあった。よって、今後の渡りの時期は潮汐の変化も含めて朝と夕刻の時間帯での観察が必要と考えられる。

そのシギ / チドリ類の観察種では、オオソリハシシギやミユビシギなどは海岸のみでの観察だったが、トウネンやコチドリやキアシシギなどは、河口 / 海岸や、干潟のある星が浦川下流域で観察ができ、場所による観察種の違いも観察できた。

また、シギ / チドリ類の観察種数は、通年でほぼ同数で推移しているが（表 5）、2020 年以降から、セイタカシギの観察数と観察機会が多くなっている。2019 年以前では 2013/7/4～7/7 に 3 羽、2016/6/2 に 3 羽、2017/5/14～5/23 に 1 羽、2017/8/27 に 1 羽、2019/9/10 に 1 羽（有澤 私信）、2019/9/18 に 2 羽（有澤 私信）だったが、2020 年以降の観察では 7/10 に 2 羽（有澤 私信）、7/16～7/23 に 4 羽、7/26～7/28 に 1 羽、9/23～10/8 に 1～2 羽（9/30 のみ 2 羽を観察）であり、2021 年では 4/23～4/25 に 1 羽、4/29～5/2 に 3 羽、5/3～5/18 に 1 羽、6/1～6/3 に 1 羽、6/10～6/27 まで 1～3 羽（6/10～6/16 に 1 羽、6/17～6/22 に 2 羽、6/24 に 1 羽、6/27 に 2 羽）、8/28～9/7 までは 1 羽を観察した。このように、2020 年以降は特に観察機会が多くなり、観察期間が長い傾向が見られた。また、6 月以降は幼鳥も含めて観察機会が多かった。要因として、星が浦川での餌の資源量が豊富であることや、2020 年以降で移動するルートの変化もあると推測している。また、幼鳥は繁殖してから親鳥と暫く行動を共にする傾向があるため、6 月以降は幼鳥を観察する機会が多かったと判断している。

なお、このエリアのシギ / チドリ類では、星が浦川下流域で観察回数が比較的多いキアシシギ / コチドリ / トウネンを、シギ / チドリ類の飛来状況判断の基準として、2017 年より記録を行っている。2017～2021 年の記録による飛来時期では、コチドリが早く 3/31～4/15 までの間に観察でき、遅れて 4/23～5/7 の間にキアシシギ、その後の 5/5～5/15 にトウネンであった。また、終認ではコチドリの幅が広く 7/25～9/20 であり、キアシシギは 8/29～9/19、トウネンはこの 3 種では遅く、9/15～10/19 であった。そのうちキアシシギは、2021 年 8 月で急激な観察数の上昇が観察できたが、建設中の第五埠頭の施設内から、星が浦川方面へ飛翔する、50+ の群れの観察があったことが要因である（表 6）。この第五埠頭の施設内から、飛翔するキアシシギの観察は、2021 年が初めてであった。また、他にもシギ / チドリ類の群れが、第五埠頭の施設内から、上空へ飛翔する姿を観察しているが識別は困難であった。

ただ、トウネン / コチドリの観察数は 2021 年では、他の年と比較して大きく減少している（表 7、8）。要因としては、他の観察地でも聞く、個体数の減少も当然考えられるが、キアシシギ同様に、トウネン

表 5. チドリ目 2017～2021 年別観察記録

目名/科名	種名	2017	2018	2019	2020	2021	NO
チドリ目 チドリ科	ケリ					●	1
	ムナグロ	●	●	●	●	●	2
	ダイゼン		●			●	3
	ハジロコチドリ			●			4
	コチドリ	●	●	●	●	●	5
	シロチドリ	●	●	●	●	●	6
	メダイチドリ	●	●	●	●	●	7
チドリ目ミヤコドリ科	ミヤコドリ		●	●	●	●	8
チドリ目セイタカシギ科	セイタカシギ	●		●	●	●	9
チドリ目 シギ科	オオジシギ	●	●	●	●	●	10
	タシギ	●	●	●	●	●	11
	オオハシシギ					●	12
	オグロシギ		●				13
	オオソリハシシギ	●	●	●	●	●	14
	チュウシヤクシギ	●	●	●	●	●	15
	ホウロクシギ		●		●	●	16
	ツルシギ			●			17
	アカアシシギ				●	●	18
	コアカアシシギ	●	●	●	●	●	19
	アオアシシギ	●	●	●	●	●	20
	クサシギ					●	21
	タカブシギ	●	●	●	●	●	22
	キアシシギ	●	●	●	●	●	23
	ソリハシシギ	●	●	●	●	●	24
	イソシギ	●	●	●	●	●	25
	キョウジョシギ	●	●	●	●	●	26
	オバシギ		●	●	●	●	27
	ミユビシギ	●	●	●	●	●	28
	トウネン	●	●	●	●	●	29
	ヨーロッパトウネン	●	●				30
	オジロトウネン	●		●	●		31
	ヒバリシギ		●			●	32
	アメリカウズラシギ	●					33
	ウズラシギ	●					34
	ハマシギ	●	●	●	●	●	35
	キリアイ	●			●		36
	エリマキシギ		●	●	●		37
	アカエリヒレアシシギ	●	●	●	●	●	38
年別合計種数		25	27	26	27	30	

やコチドリも、第五埠頭の施設内へ飛来している可能性はあるとも推測している。

また、コチドリに関しては、毎年星が浦川下流域で観察出来る幼鳥の観察数が、2021年では特に減

表6. キアシシギの2018～2021年 月別最大数

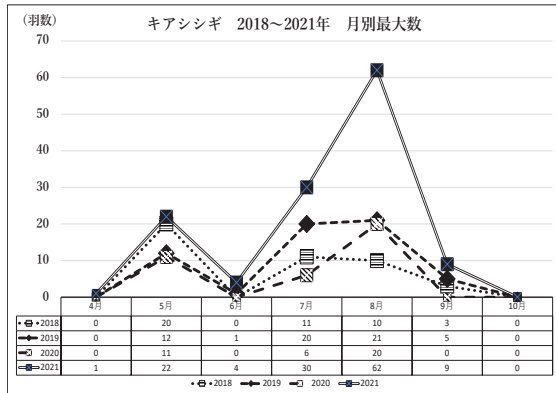


表7. トウネンの2018～2021年 月別最大数

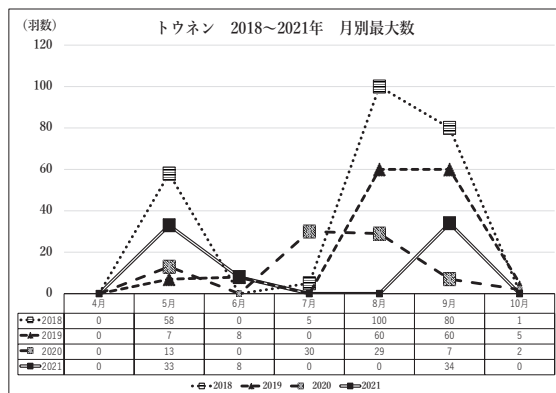
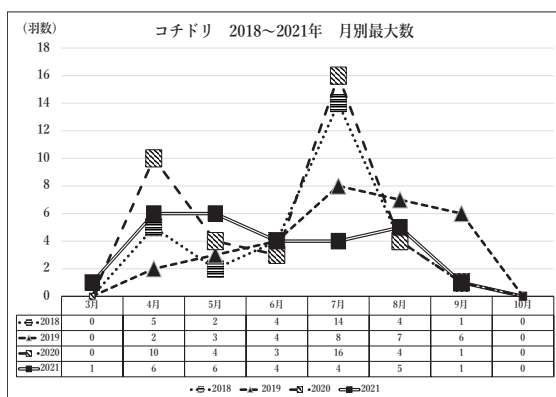


表8. コチドリの2018～2021年 月別最大数



少している。第五埠頭施設内で繁殖が行われている可能性や、星が浦川下流域への来訪者が近年増加していることもあり、コチドリの繁殖場所を分からず、踏み荒らすなどの負荷要因もあり、繁殖に失敗した可能性もあるとも推測しているが、第五埠頭の施設内での観察／確認ができないこともあり、推測の域を出ない。ただ、コチドリとトウネンの減少は、2021年だけの可能性も否定できないことと、今後の第五埠頭の工事の推移により、観察数の変化も考

えられるため、今後も現地での観察は必要であると考えている。

カモ科

4月ころから、春の渡りでカモ類が第四～第五埠頭間の海上で集結し群れを形成する。海上の群れは主にコガモとスズガモで構成され、コガモは毎年最大1,000+ (2021/5/5では海上でコガモ1,357+)の群れとなる。また、この群れを観察すると、ハシビロガモやシマアジも少数ではあるが混じることもある。なお、この時期は春の渡りの時期でもあることから、日によって観察数が激減することもあるが、この大規模な群れは、おおよそ5月中旬ころまで海上で観察できる。

他にも、この時期でのカモ科観察では、釧路管内で観察機会が少ないと聞くカルガモ (貞國 2019) も、星が浦川下流域で記録がある。

近年では、釧路管内でもカルガモの観察数が増加しているが、星が浦川下流域でも、海星橋付近から河口までの下流で観察数が増加してきており、2021/9/9に12羽のカルガモを観察する機会があった。

また、星が浦川の下流は、マガモの繁殖が観察できる場所でもあり、カルガモも同様の環境で繁殖可能であると思われるため、今後はカルガモの繁殖も可能性があると考えている。そのカルガモの、星が浦川での初認記録としては2017/4/23, 2018/4/18, 2019/7/30, 2020/6/7, 2021/5/7だった。また、終認の記録では2017/12/31, 2018/8/29, 2019/9/8, 2020/9/10, 2021/9/28であった。

その後、秋頃から冬になると、不凍河川ということもあり、海星橋上流～河口付近では、オナガガモ／キンクロハジロ／コガモ／スズガモ／ヒドリガモ／マガモ／主体で観察を行える。2017～2021年の観察記録から見ると、カモ科で秋の渡りによる飛来が早い順での5種では、スズガモが最初で7/18、次にクロガモで8/10、以降はキンクロハジロが8/18、コガモが8/26、シマアジが8/29だった。また、観察期間で終認が早い順での5種では、オオハクチョウとホシハジロが2/11、ミコアイサが2/23、ホオジロガモとハクガンが3/4だった。ただ、クロガモは2017年では毎月観察できたために、初認と終認の判断が困難であったが、その年の6月では1, 4, 13, 18, 25, 27に観察されたものの、7月は11日のみであり、8月になると10, 13, 15日の観察であった。このため、観察回数の減少と増加を考慮して、2017年の終認を7/11、初認を8/10とすることとした。また、コガモもクロガモ同様に、2017年では6/25と7/6に観察されたあとは、9月に7, 10, 12, 14, 17, 21, 24, 26日に観察があったことから、同じく観察回数の減少と増加を考慮して、この年での終認は7/6とし、初認は9/7とした。他にオオハクチョウでも、2018～2019年では観察が全くなかったものの、他の年での初認記録では、2017/12/6, 2020/1/23, 2021/1/2, 2021/10/6であり、終認は2017/12/7, 2020/2/12, 2021/2/11であった。しかし、終認としての記録が2017/12/7は早すぎることを考慮して、2020年と2021年の記録を参照している。尚、コオリガモに関しては海上での観察はなく、星が浦川下流域の観察のみであり、2017/10/25, 2017/11/2, 2019/12/8に記録があり、共に雄1羽での観察であっ

2013 年から 2021 年までの星が浦川下流域における鳥類観察記録

た。

また、今後の観察で興味深いのが、2019 年以降の渡りの時期に、マガン / ハクガン / シジュウカラガンなどのガン類が、上空通過も含めて、星が浦川下流域で観察数が増加していることである。2018 年以前では観察がなかったものの、2019 年からはマガンが 10/13 (3 羽・9 号公園)、11/10 (1 羽・星が浦川下流)、オオヒシクイが 4/21,9/11 (1 羽・上空)、カリガネが 11/20 (海岸・田島 私信)。2020 年はハクガンが 1/23 ~ 3/4 (海星橋付近)、シジュウカラガンが 11/15 (1 羽・星が浦川河口付近海上)。2021 年はコクガンが 4/15 (2 羽・海上飛行)、オオヒシクイが 10/3 (1 羽・上空)、10/6 (3 羽・上空)、マガンが 10/6 (8 羽・上空)、10/28 (2 羽・星が浦川下流域)、シジュウカラガンの群れが 10/7 (10 羽・上空) の観察があった。このように、今まで観察出来なかったガン類が観察されるようになってきており、渡りのルートに変化が起きたとも思えることから、今後も星が浦川下流域で、ガン類が観察できる可能性は、高いものと判断している。

年別構成比・漂着死骸

末尾ではあるが、2013 年から 2021 年までに観察できた鳥種を科目分けし、その観察数と構成比を記す (表

9)。なお、詳細に観察できた 2017 ~ 2021 年は年単位でも表示している。カモ科 / シギ科 / カモメ科の構成比が高いものとなっているが、要因としては、河口付近の下流域ということもあって、海岸が近くにあることと、緩やかな流れかつ、河口付近のため潮位の影響を受けやすく、その地形的要因で干潮時に干潟が出現することと、星が浦川は不凍河川であることが、大きな要因であると判断している。

なお、2017 年以降から観察数は微増であるが、現地での観察回数が増加したことや、筆者の識別での知識と精度の向上、また 2020 年以降から夕刻の観察機会も増やしたことで、早朝では観察出来なかったシギ / チドリ科の観察ができたことと、秋以降では、タカ科 / フクロウ科の観察確率が高くなったことが、要因ではないかとも考えている。

また、表 9 にウミスズメ科 (2019/7/24 ウトウ 1 羽) / ミズナギドリ科 (2018/6/28 フルマカモメ 1 羽・翌日落鳥) の観察記録があるが、共にたった 1 度のみしか観察できなかった。しかし、2019 年から確認を行っている漂着死骸の確認 (表 10) では、ウミスズメ科で 2 回 (2019/9/1 エトピリカ幼鳥 1 羽、2020/8/16 ウトウ 1 羽)、ミズナギドリ科で 4 回 (全てハシボソミズナギドリ・2019/10/9 に 1 羽、2021/5/8 に漁具被害 2 羽、2021/9/24

表 9. 2013 ~ 2021 年 科 / 年別構成比

	2017年 観察種数	2017年 構成比	2018年 観察種数	2018年 構成比	2019年 観察種数	2019年 構成比	2020年 観察種数	2020年 構成比	2021年 観察種数	2021年 構成比	2013~2021年 観察種数	2013~2021年 構成比
カモ科	18	20.45%	17	18.89%	20	21.05%	21	20.79%	23	21.30%	28	18.30%
カイツブリ科	4	4.55%	3	3.33%	4	4.21%	4	3.96%	4	3.70%	5	3.27%
ハト科	0	0.00%	0	0.00%	1	1.05%	2	1.98%	2	1.85%	2	1.31%
アビ科	1	1.14%	1	1.11%	1	1.05%	1	0.99%	2	1.85%	3	1.96%
ミズナギドリ科	0	0.00%	1	1.11%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.65%
ウ科	2	2.27%	2	2.22%	1	1.05%	3	2.97%	3	2.78%	3	1.96%
サギ科	2	2.27%	2	2.22%	2	2.11%	2	1.98%	2	1.85%	3	1.96%
クイナ科	1	1.14%	1	1.11%	2	2.11%	1	0.99%	1	0.93%	2	1.31%
カウコウ科	0	0.00%	1	1.11%	1	1.05%	1	0.99%	1	0.93%	1	0.65%
アマツバメ科	1	1.14%	1	1.11%	2	2.11%	1	0.99%	2	1.85%	2	1.31%
チドリ科	4	4.55%	5	5.56%	5	5.26%	4	3.96%	6	5.56%	7	4.58%
ミヤコドリ科	0	0.00%	1	1.11%	1	1.05%	1	0.99%	1	0.93%	1	0.65%
セイタカシギ科	1	1.14%	0	0.00%	1	1.05%	1	0.99%	1	0.93%	1	0.65%
シギ科	20	22.73%	21	23.33%	19	20.00%	21	20.79%	20	18.52%	30	19.61%
カモメ科	10	11.36%	7	7.78%	9	9.47%	9	8.91%	6	5.56%	13	8.50%
トウゾクカモメ科	1	1.14%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.65%
ウミスズメ科	0	0.00%	0	0.00%	1	1.05%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.65%
ミサゴ科	1	1.14%	0	0.00%	1	1.05%	1	0.99%	1	0.93%	1	0.65%
タカ科	4	4.55%	4	4.44%	3	3.16%	3	2.97%	6	5.56%	9	5.88%
フクロウ科	1	1.14%	1	1.11%	1	1.05%	1	0.99%	0	0.00%	1	0.65%
カワセミ科	0	0.00%	1	1.11%	1	1.05%	0	0.00%	1	0.93%	1	0.65%
キツツキ科	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	1.85%	2	1.31%
ハヤブサ科	1	1.14%	2	2.22%	2	2.11%	2	1.98%	1	0.93%	3	1.96%
カラス科	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	1.98%	2	1.85%	2	1.31%
シジュウカラ科	0	0.00%	1	1.11%	1	1.05%	0	0.00%	1	0.93%	1	0.65%
ヒバリ科	1	1.14%	1	1.11%	1	1.05%	1	0.99%	1	0.93%	1	0.65%
ツバメ科	2	2.27%	2	2.22%	1	1.05%	1	0.99%	2	1.85%	2	1.31%
ヒヨドリ科	0	0.00%	1	1.11%	1	1.05%	0	0.00%	1	0.93%	1	0.65%
センニュウ科	1	1.14%	1	1.11%	1	1.05%	1	0.99%	0	0.00%	1	0.65%
ヨシキリ科	1	1.14%	1	1.11%	1	1.05%	1	0.99%	1	0.93%	1	0.65%
ミソサザイ科	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.93%	1	0.65%
ムクドリ科	1	1.14%	1	1.11%	1	1.05%	1	0.99%	1	0.93%	2	1.31%
ヒタキ科	2	2.27%	3	3.33%	3	3.16%	3	2.97%	2	1.85%	4	2.61%
スズメ科	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.99%	1	0.93%	1	0.65%
セキレイ科	3	3.41%	5	5.56%	3	3.16%	3	2.97%	4	3.70%	6	3.92%
アトリ科	3	3.41%	2	2.22%	2	2.11%	4	3.96%	3	2.78%	4	2.61%
ツメナガホオジロ科	0	0.00%	0	0.00%	1	1.05%	2	1.98%	1	0.93%	0	0.00%
ホオジロ科	2	2.27%	1	1.11%	1	1.05%	2	1.98%	2	1.85%	5	3.27%
合計	88	100.00%	90	100.00%	95	100.00%	101	100.00%	108	100.00%	153	100.00%

に1羽, 2021/10/6に1羽)であった(図7～9)。

この漂着死骸の確認だが、星が浦川の海岸からの観察が困難な種も確認する機会があることや、外洋での変化に気付く可能性もあると判断して、2019年6月から行っている。この確認により、クロトウゾクカモメ幼鳥1羽や、エトピリカ幼鳥1羽など、海岸からは観察が困難である種の記録ができた。また、この両種は海岸に打ち上げられており、食害や腐敗が無い状況であった。このため、胸骨を確認する方法を知識として得ていたこともあり(吉野ほか2017)、ゴム手袋を使用して確認を行うと、竜骨の突出を確認できたことから、衰弱と判断しているが、外洋で衰弱死を起こす要因までは、洋上の観察も含めて確認ができないため、本稿では記載を行っていない。

表 10 . 2019～2021年 星が浦川下流域 漂着死骸

	月日	種名	備考
2019	6/9	コアホウドリ	1羽/星が浦川海岸
	6/26	コアホウドリ	1羽/漁具被害/星が浦川海岸
	9/1	エトピリカ	1羽/星が浦川海岸
	9/21	クロトウゾクカモメ	1羽/星が浦川海岸
	10/9	ハシボソミズナギドリ	1羽/星が浦川海岸
	10/18	カンムリカイツブリ	1羽/星が浦川海岸
	10/20	カンムリカイツブリ	1羽/星が浦川海岸
	12/31	カンムリカイツブリ	1羽/釣具被害/星が浦川河口付近
2020	3/11	ウミアイサ	1羽/星が浦川海岸
	4/8	クロガモ	1羽/星が浦川海岸
	8/16	ウトウ	1羽/星が浦川海岸
	9/6	クロガモ	1羽/星が浦川海岸
	9/6	ウトウ	1羽/星が浦川海岸
2021	2/11	マガモ	1羽/星が浦川河口付近
	5/8	ハシボソミズナギドリ	2羽/漁具被害/星が浦川海岸
	6/5	アオサギ	1羽/星が浦川海岸
	7/29	オオセグロカモメ	1羽/星が浦川海岸
	8/21	オオセグロカモメ	1羽/星が浦川河口付近
	9/4	ウミネコ	1羽/星が浦川河口付近
	9/7	オオセグロカモメ	1羽/星が浦川海岸
	9/12	カンムリカイツブリ	1羽/星が浦川海岸
	9/16	オオセグロカモメ	1羽/星が浦川海岸
	9/19	ウミウ	1羽/星が浦川海岸
	9/19	オオセグロカモメ	1羽/星が浦川海岸
	9/24	ハシボソミズナギドリ	1羽/星が浦川海岸
	10/6	ハシボソミズナギドリ	1羽/星が浦川海岸
	10/12	オオセグロカモメ	1羽/星が浦川海岸



図 7. コアホウドリ (漁具被害)



図 8. エトピリカ



図 9. クロトウゾクカモメ

後記及び謝辞

星が浦川下流域で2013年2月から現在に至るまでの、野鳥観察を紀要に報告する機会を、釧路市立博物館学芸員の貞國氏よりいただき、このエリアの記録を残すために観察記録を再度確認しつつ、纏めることとしました。また、初の論文作成ということもあって、筆者の稚拙な記載ではありますが、この星が浦川下流域の記録を纏めるにあたり、以下の方々から、情報と識別を含めた協力を多数いただき、作成することができました。末尾ではありますが記して深謝致します。

有澤真由美、貞國利夫、城石一徹、関根琢実、関根直美、田島奏一郎、千嶋淳、永澤廣治 (50音順敬称略)

引用文献

貞國利夫. 2019. 釧路湿原鳥類目録-1935年～2019年の記録. 釧路市立博物館紀要、38：23-80.
生物多様性センター. 2020. モニタリングサイト1000ガンカモ類調査2004～2017年度取りまとめ報告書. 環境省、東京.
吉野智生・渡邊秀明・浅川満彦. 2017. 釧路港内で発見された着色海鳥類の剖検記録. 釧路市立博物館紀要、39：35-38.